

賀茂縣主だより



発行所
〒603-8047
京都市北区
上賀茂本山339
賀茂別雷神社内

財団法人
賀茂縣主
同族会



石降臨御

「賀茂注進雜記」(第一当宮本縁)に

神山・加毛山同訓にして口伝あり、往昔此御降臨まします所岩根あり、是を降臨石と云う。

とあり現在の社務所の前から北を臨めば丁度鉢を伏せた様な優美とも見える山が神山であり、その山頂にある岩石群が降臨石と云われる。

(神山の写真は平成十三年一月一日付第七号一項一段を御覧下さい。)

新年のご挨拶

理事長 西池成晃

明けましておめでとございます。

皆様にはご家族お揃いで佳き新年をお迎えになられたことお慶び申し上げます。

最近はお心の痛む事件が極めて多く、賀茂の大神様へ災厄防除の願いと我々自身の自戒の誓を新たにしなければならぬように思います。

また賀茂社においてもご神威ご神徳の普及活動が活発に行われつつあるように感じます。斯様ななかで昨年の事業計画の定着化を図りながら前進すべく同族会の今年の活動方針を次のようにいたします。

「平成十八年活動方針」

- ① 会員の結束を強め同族会の主体性を強化する。
- ② 同族会の組織的能力を活かし諸課題を解決する。
- ③ 賀茂社との連携を一層強化する。

「具体的活動」

- ① 歴史勉強会の拡充による賀茂氏文化への更なる理解。
- ② 祖先の事蹟顕彰による賀茂地域の文化的評価の向上。(賀茂季鷹、北大路魯山人ほか)
- ③ 地元文化活動への積極的参加。
- ④ 「神山・社叢を守る」有志(G)活動の活発化。(三月十一日(日)、十一月十二日(日))
- ⑤ 賀茂社復活神事への積極的協力。(笠懸、流鏝馬など)
- ⑥ 賀茂社第四十二回式年遷宮(平成二十七年)記念事業、奉納事業への協力。
- ⑦ 小谷墓地共同管理に関する京都市のアクションへの協力。
- ⑧ IT活用によるヤング層とのコミュニケーション。(メールマガジンの活用)
- ⑨ 内部諸規則類のみなおし。

昨年前半の賀茂社恒例祭事への奉仕活動は「曲水の宴」、「競馬」、「賀茂祭」へ会員諸氏が賀茂氏として奉仕し、賀茂社の伝統的行事存続のために注力貢献いたしました。また年間後半の同族会定例行事「重文系図の曝涼」、「祖先祭」についても会員諸氏のご協力を得て無事終えるこ

とができました。有難うございました。

このほか在實千年祭記念事業の一つとして「重文系図」、「賀茂神主補任記」さらに、江戸末期の氏人住居の配置を偲ばせる「加茂郷古地図」等のデジタル複写も行いました。これらはいずれ美麗な複製図書(DVD-ROM)としてお手元にお届けすることが出来ると思います。

これに関連して「重文系図」の詳細な解説冊子を発行いたしました。これは藤木文雄理事の長年にわたる賀茂文化に関する調査研究の一端として著作され同族会に版權と冊子三百部を寄贈されたものです。

これにより「重文系図」のより一層歴史的認識を深めることができるものと思えます。感謝して頂きます。

その他、賀茂社への新しい奉仕活動として八百年前に奉納されていた「流鏝馬」と「笠懸」の復活実現に協力し今後も毎年奉仕しうる端緒を開きました。

更に、賀茂氏としての恒久的奉仕として「神山・社叢を守る」有志(G)活動を新設いたしました。

これは現在放置荒廃している神山を我々賀茂氏の太古からの祈りと誓いの対象の中心として相応しい信仰的状态を我々の奉仕によって取り戻そうとする活動です。神社当局も我々賀茂氏の故を以って永久的奉仕として禁足地神山への立ち入りを特別に許可して下さいました。

そしてその第一回を昨年八月二十一日に実施いたしました。

当日は神社から宮司以下幹部四人、東京支部からも四人参加し総勢二十一人で降臨石(磐座)周囲の雑木を伐採し注連縄を廻らしお祀りをしてまいりました。太古、我々の先祖がなしていたであろうこの祀りをこの同じ場所で行っていると考えたとき非常に運命的なものを感じました。(今年の実施要領は別途)

なお今回の活動に際し団体名を明確にするべきとの考えにより、会員岡本安正様から同族会旗をご寄附して下さいました。改めて厚くお礼を申し上げます。

今年も計画に沿って活動を進めてゆきますので何とぞよろしくご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

皆様のご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。



平成十七年十月三十日

賀茂縣主同族会祖先祭

(敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-----|----|----|----|----|----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|-----|-----|----|---|
| 藤木 | 山本 | 藤木 | 山本 | 岡本 | 蔣池 | 堀内 | 岡本 | 藤木 | 西池 | 藤木 | 文雄 | | | | | | |
| 琢也 | 浩久 | 秀昭 | 宗尚 | 安正 | 信男 | 邦保 | 修 | 保誠 | 隆造 | 文雄 | | | | | | | |
| 市 | 中大路 | 堀内 | 岡本 | 戸田 | 山本 | 藤木 | 西池 | 山本 | 山本 | 三ツ橋 | 浦野 | 岡本 | 錦部 | | | | |
| 忠頭 | 平頭 | 義晃 | 清紀 | 保輝 | 武久 | 襄治 | 華子 | 節子 | 愛子 | 知子 | 邦夫 | 清信 | 俊和 | | | | |
| 堀川 | 藤木 | 藤木 | 井関 | 津田 | 津田 | 藤木 | 芝 | 藤木 | 西池 | 江島 | 藤木 | 堀川 | 北大路 | 梅辻 | | | |
| 潤 | 稔子 | 伸子 | 勝博 | 正美 | 恵子 | 史江 | 澄清 | 保直 | 朝子 | 恒氏 | 直子 | 三恵子 | 澄代 | 篤子 | | | |
| 藤木 | 東辻 | 岡本 | 東辻 | 市 | 岡本 | 芝 | 藤木 | 北大路 | 西池 | 松田 | 西池 | 竹川 | 高田 | 北大路 | 藤木 | 梅辻 | |
| 和子 | 正子 | 吉子 | 保和 | 和顯 | 正保 | 常清 | 千夏子 | 元顯 | 成晃 | 一雄 | 鈴子 | 稔子 | 穰 | 葵子 | 十紫子 | 美清 | 諄 |

葵歌壇

上賀茂 市 和顯

千早振る賀茂の社へ初詣
千代に八千代に御世の御栄

徒に年齢重ねて九十三
何を以てか國に報いん

正遷宮十年先に迫りしを
誰に託さん我が玉串は

冷泉家玉緒会所属

初音 上賀茂 北大路 和子

あら玉の年のはしめに春告けて
初音のとけき谷の鶯

初春庭
羽子板の羽根打ち返す音も清か

梅もほころふ初春の庭
子日

門ことに幸招く姫小松
子の日をえらひ引きにけるかな

遠地山花
眺めやる遠地の山辺に霞たち

花に明け初む春のあけほの
開

弁慶の声色たかくひひくかな
安宅の関の荒き磯へに

葵俳壇

上賀茂 藤木 十紫子

秋ひびく日傘礼の宮の巫女の鈴 (近江八幡)

元旦や音一つ無く朝となる
床の間に蠟梅漂と香りをり

上賀茂 北大路 みよ子

賀茂社冷々として天長祭
元朝に白々と立てり賀茂宮司

嫁の手のさらつきに触る春遠き

葉山雜感

神奈川 藤木 顯通

湘南海の一角を占める人口僅か三万五千人の小さな町葉山が全国に膾炙されるのはご用邸の存在と戦後ヨットの遊び仲間 軽佻浮薄な太陽族発祥の地であろう。

私はこの地に居を構えて三十年、然し冒頭の理由を考慮して住んだ訳ではなかった。それは娘の学校が旧秩父宮邸近くの高輪から田園都市線長津田へ移る事になり自宅から学校までの通学は困難が予想される為、急遽転居を考えざるを得ない事であった。転居先の条件として三点、その一つは地盤が固いこと、二つは火事などの類焼されにくい住宅環境、三つは二階に家族構成に必要な四間とトイレが有る条件で田園都市線や東横線沿線を中心に探し回ったが徒勞に終わった。

結局、現在の横須賀線沿線の地に落ち着いたが購入前に心配していた通勤距離のハンデも慣れるに従いそ

れなりの楽しみも見つけられるようになった。いざ通勤してみるとラッシュ時の電車は楽に座り新聞も読め、会社まで一時間二十分、ただ困るところは帰りの終電が二十三時三十分と意外に早い為、終電を気にする羽目に陥ることだ。幸い役員の端くれになったので今と違って当時は車を用意してくれて有り難かった。

住宅環境は緑の山と海の青に恵まれているものの閑静すぎて女性にとつてバス停から徒歩五分の夜の一人歩きは怖いので日常の行動は車が主流となり女性ドライバーの数が全国の中でもかなり高率ではなからうか。

第一線を退いて葉山の歴史を見るとせいぜい明治中期以降に初めて注目されるようになりそれまでは単なる一漁村にすぎなかった事を知る。明治二十六年 英照皇太后(孝明天皇 后 夙子)の保養地として明治政府のお雇い医師ベルツやイタリア公使マルチーノの進言によりご用邸建設は着工された。資料を読むと英照皇太后はかなり病弱であったようだ。この間の経緯は郷土史葉山に詳細が紹介されていたのでその一部を以

下抜粋。

明治二十六年度臨時費 宮殿費 宮殿土木費 葉山御用邸建築費 高金参万八千九百五拾壹円八十壹錢五厘(途中略)右者今般 皇太后御避寒為メ相州三浦郡葉山村御料地へ御殿建築の儀云々とある(宮内庁書陵部所蔵 經濟會議録 明治二十五年 原文のまま)。

ご用邸の落成は明治二十七年一月十日、引き渡しは同年一月二十二日であった。英照皇太后の母菅山は関白 九条尚忠妻、父 南大路長尹は重要文化財 賀茂禰宜神主系図の古系図に記されている 長明 号南大夫の後裔であることを藤木文雄さんからご教示頂いた。

英照皇太后は年若くして孝明天皇と死別そして東京に転居と故郷京都を離れた生活は女性として時代に翻弄され体調をくずされる因を招いたのであろうことは推察できる。

戦前、帝国海軍横須賀鎮守府が置かれた三浦半島一帯は軍秘のベールに包まれた要塞地帯として厳しい監視下にあり、その中であつた葉山ご用邸は防諜確保に適していたため日露戦争開戦前夜葉山に別邸を有する

元勳たちはこの地で多くの建議がなされた。風雲急を告げる当時、各国要人の目を避けるために葉山は格好の場所だったに違いない。時代は下り大正三年の推定世帯数約千五百に対し別邸や別荘は百三十家の多きに達しており(左記注)之では税金など町財政の運営は可成り歪であつたろうし現在の町財政にその名残が未だにある。

(注)大正五年十月一日国勢調査では住民七千五百五十八名、千四百九十六世帯とあり別邸/別荘族対町民の経済格差は比較にならないであろう。

昭和の御代は長期療養中であつた大正天皇がこの地で崩御され、踐祚により始まった。

近世の歴史を紐解くと葉山ご用邸は明治日本の発展に始まり昭和の動乱と敗戦そして現在の経済大国の姿を見てきたと云えよう。現在、変わらぬ風情を残すのはご用邸のみとなり多くの別邸は公園、美術館や会社の療養所になり子孫は数えるほどのしか住んでいないが今やそれぞれの道に社会生活を営んでいる。

実際、葉山に住んでいると良い所

にお住まいですねと人から云われもするが果たして如何なものであろうか。日本國中、何処に居を構えようと住めば都と人は云う。大正三年のサンフランシスコ万国博覧会に出品した葉山村の写真説明文に 葉山村ハ日本国横浜港ヲ去ル約八里ノ地ニシテ(本村ヨリ約二十町ノ所マデ汽車ノ便アリ)夏涼シク冬暖キ風光明媚ノ勝地ナリと紹介されている。

夏涼しく冬暖かきはオーバーな表現だが盛夏でも気温は三十度を超えることは少なく、冬は霜や氷が張る事は珍しい。夏などエアコンを使用する頻度は当然少ない由縁である。三浦半島は地形上相模湾と東京湾の海水温度によってマイルドな気候になるのである。

三浦半島南部は活断層が多く集中、特に地盤の弱い沖積層が多い海岸地帯は地震被害の大なる事を恐れるが、こればかりは日本國中安全な場所は無からう。

場所柄、漁港に近いので魚介類は新鮮。何しろ魚臭くないし味は抜群と良いことづくめに聞こえるが、物価が高く、地元の商店主の態度は横

柄などと評判は必ずしも芳しくない。これでは特色ある地元商店街は衰退し、大型店舗に客が集まり地方色が薄れるであろう。

この原稿を書いている今、正面の山から鶯と時鳥の競演の囀りが聞こえてきたが、間もなく時鳥が去り、替わりに鯛の聲が全山に響き渡る頃海岸は今年も若者たちで埋め尽くす彩り賑やかな盛夏を迎える。

海岸に面して瀟洒なレストランやコーヒー店など多く立ち並び、デパートコースのドライブに事欠かないリゾート地だが、葉山から逗子、鎌倉や江ノ島にかけて町全体が観光の町である。

一方、住民の多くは高齢者なので循環器やガンなどの病院が近くにありのりも有り難い存在、私もその恩恵に預かった一人。ヤレヤレの偽らざる心境だ。

仕事の合間を縫って我々夫婦は混雑の週末を避け、海岸に出てはお互いデジカメ片手に写真を撮ったり、偶には夕日に輝く海を眺めながら、コレステロールを横目にレストランで食事を楽しむ今日この頃だが、一

番の楽しみは人様と同じく子供たちや友人たちとの会食である。

町民にとつて静かな楽しみは時々放映されるが例年二月初旬陛下ご一家のご用邸前の砂浜で繰り広げられる交流の場で普段の世間話や年々成長される微笑ましい愛子様にお会い出来ることであろうか。

過去の賀茂競馬の記録から

岩倉山本宗尚

宝永二(一七〇五)年五月五日のこと、九番左方乗尻の木工権助氏僚は競馬の勝負に負けてしまった。この馬の馬主である梅ヶ辻町の六兵衛はひどく腹を立て、神事の場所にも関わらず、階下の前で色々と悪口を言い立てた。氏僚は大事な御神事だと思つて黙つてはいたが、神事も終わり家へ戻る頃になると、再び山本町の角で氏僚を大勢で取り囲んでまた悪口を言い続けた。氏僚は我慢ならず鞭で追い払つたところ、杖で反撃され冠などをつぶされてしまった。氏僚は近所の家へ引

き入れられて騒動はなんとか収まった。五月七日に御沙汰となり、乗尻などの口上を聞き吟味したところ、六兵衛の仕打ちは言語道断のものであり、六兵衛の刀拵の職を辞職させることで決着となった。

その後も六兵衛の氏僚に対する悪口はとどまらず、ついには追放させられることになったと言う。

この時代は、現在の競馬よりも勝負に勝つか負けるかが非常に大きな問題であった。同時期の儀式次第を見ると、競馬後の直会も競馬の勝または持(引き分け)の乗尻しか出られなかったことが記述されており、勝の乗尻の馬主も同様の恩恵に預かつていたと推測される。

ちなみに、賀茂競馬の特徴の一つは庄園名(倭文床、金津庄など)を名乗ることであるが、現在とは違つて十二番以降は社司の役名(正祢宜、正祝など)本稿で紹介した氏僚は正祢宜の馬に乗つた。)が付いていたり、一日の乗尻の名と五日の乗尻の名が異なつていたりする。このような現在の賀茂競馬との違いは、他にも意外に多く見つかるので非常に興味深い。

任海鎮座 加茂神社 参詣の記

岩倉藤木文雄

一、はじめに

賀茂注進雜記の第八神領の部に掲げる賀茂別雷神社神領四十二ヶ荘に対する武士の狼藉停止を命じた有名な寿永三年の源頼朝の下し文に「越中国 新保御厨」の名があり、また賀茂重保撰の月詣和歌集 卷二に重保の「越中下向」にたいする歌林苑の仲間の寂蓮法師、藤原敦仲などの餞の歌があつて、重保が治承二年（一一七八）八月頃所用で越中に下つた事が知られている。当時賀茂重保は前年九月前神主家平の卒去のあと、十八代神主職に補任されて間の無い頃で、この下向の目的は新保御厨の設営であつたと推察される。以前「神主 重保とその時代」に彼の事績を簡略に纏めた経緯があり、その拾遺を果たす気持もあつて、現地に重保の足跡を辿つてみた。

二、参詣の覚え

所在 富山市任海（元越中国新川郡新保村任海） 富山県が富山空港開港に伴う環境整備計画の一環として開発した富山県国際健康プラザとやま健康パークの一郭にある。平成八年十一月同パークの開業のため旧社地が接收されて、少

南の現社地に移転した（Ⅷ〇七六一四二九一〇七四五）。



加茂神社全景

祭神 賀茂別雷神

沿革 白鳳年間の創祀と伝えるが実際は中古新保御厨の創設時に別雷神を分祀したものと推察する。源平争乱時、頼朝の命により射水郡三十三ヶ荘の總社の加茂神社（射水郡倉垣庄にある賀茂御祖神社の分社）に付けられ、更に寛元元（一二四三）年幕府より御厨停止の状が下り、倉垣庄加茂社に合祀された。そのご宝徳三（一四五二）年、後花園院の綸旨により越中国新保御厨領が賀茂別雷神社に安堵されるに及んで旧地の新保に復祀された。ただ、社地のある地名は倉垣庄の故地に因み任海と称した（なお、新保御厨

は賀茂社の立荘の後、神主重保卒去の翌建久三年（一一九二）に後白河法皇が定めた「長講堂領」の所領の一つに含まれている。分有であらう）。

年中祭事 月並祭ほか定例祭祀は行っていないとのこと。

社殿 旧社殿はもとの写真では瓦葺ながら一間社流造りの模様であるが、上の写真では新社殿は寧ろ「日吉造」に近い仏寺に似た造り。総檜造り瓦葺の豪壮な社屋と新調の大きな神馬の銅像がある。

宮司 高倉朝明氏。就任後四十年。

上賀茂社との関係 上賀茂神社の歴代宮司から熱心な勧誘を受けているが「賀茂社連合」には未参加、また賀茂社にも未参詣の由。

社伝 詳しい社記は現存せず、口伝も未詳。おそらく倉垣庄の加茂社にはなんらかの記録を残している可能性がある。畏友の大山喬平京大名誉教授は中世荘園調査の目的でその地を訪ねられたとのこと。新湊市や射水郡下村（寒江荘跡）と小杉町戸破に六社の加茂社があり、下村では五月四日にやんさんま（やぶさめの誼）が奉納される。（現在全社が射水市域に入った）

神徳 健脚 出雲国譲りのとき天照大神の命で別雷神が出雲に派遣されたといえる。

（本文は平成十四年十月現在の記録）

御返事のお願

理事 松田一雄

毎年祖先祭及びその他において御案内を差し上げております。しかしながら御返事の頂けない方は数多く見受けられます。出席の有無にかかわらず、返信欄に近況等を記入のうえ、御返事を頂きたくお願い致します。

なお平成十七年秋の祖先祭の状況は、三九五名の会員に案内を差し上げましたが、出席者は六十六名で、欠席の御返事を頂いた方は一九六名でありました。出席返事の無い方は一五五名（約四割）もありました。出席の有無にかかわらず皆様の近況を知るためにも今後は近況を附記のうえ御返事頂きたくお願い致します。

祖先祭には元三重大学教授岡田精司先生の「歴史家のみた上賀茂神社の特色」と題した講演があり、上賀茂神社は、古代祭祀の姿を留める唯一一つの神社であり古代祭祀の形態が今も残り朝廷と深いかわりがあり、神社建築様式が全国の神社建築の基準であるとの講演を頂きました。

又平成十六年度の助成金の応募実績は三七三名中一八三名で約四九%でした。今年度（平成十七年度）についてもよろしく御協力をお願いします。

「梅辻」の古い家のいと

上賀茂 梅辻 諄

昭和六一年以来、京都市有形文化財の指定を受けていましたが、座敷の軒は傾き、棟は凹んで、梅雨時ともなれば洗面器やバケツを総動員して雨漏り受けに走りまわる毎日でした。平成

七年、あまりのことに相談に行った市文化財保護課で直ちに修復工事の着工が認められて補助金が支給されました。この座敷部分はわが家でも変わった意匠の部分で、花頭窓と濡縁をつけ、天井も柱も黒塗りで、伝え聞く所では御所でもさるやんごとなき方の書斎であったのを拜領してわが家に移築したとの事です。移築以来二百余年も経ったので屋根葺更とは云いながら、実際は垂木も柱も交換して解体修理に近かったのです。天井や梁に溜った埃が一齐に舞上がって庭や前の道路まで真つ白になる大工事でした。

その四年後の平成十一年に旧宅の北半分である居住部の屋根葺更が認められ、瓦は勿論、梁や垂木も全部更新しました。明治までは社家の居宅の棟の高さは神社のノ鳥居を越えることが堅く禁じられていたので、この居住部の屋根裏はすべて部屋になっています。瓦もよくこれまでと思うほ

ど、ボロボロになるまで使い、壁や柱の補修にも小さい木片を大切に打つけて、これでも文化財かと思うほど質素なもので、御先祖のつましい生活が偲べれます。そして、その三年後には表門と男部屋の補習も完了し、座敷部の襖や畳も取り更えて、やっと社家の見学希望の方にお見せできる姿になった次第です。

この上賀茂も古い家が齒の抜けるように減って行き、新しい住宅が増えて街の雰囲気も変わって来ました。なぜ、金をかけてまで古い家にこだわるのかと聞かれると、古い家への愛着と郷愁としか云えませんが、古い家並が失われた時にはこの上賀茂はもはや上賀茂でなく、ありふれた住宅地となる

ことは確かです。ヨーロッパの古い街並の執念を見習う必要があります。

賀茂歴史勉強会からのお知らせ

賀茂歴史勉強会の会合を毎月一回開催しています。ご自分でいろいろと研究されている歴史の話題をお持ちの方は是非御参加下さい。お尋ねは梅辻迄。

平成十八年一月二十九日(日)午前十時より、上賀茂小ふれあいサロンにて上賀茂文化フォーラム(自治連合会、町並保存会、賀茂文化研究会)を開催します。京産大藤岡先生による『地域ぐるみの「子ども・学校」の安全について』

平成18年役員会開催予定(於 神社)

(1) 理事会

- 第43回 平成18年 2月19日(日) 13:30
- 第44回 平成18年 6月11日(日) 13:30
- 第45回 平成18年10月15日(日) 13:30

(2) 評議員会

- 第39回 平成18年 2月12日(日) 13:30
- 第40回 平成18年 6月 4日(日) 13:30
- 第41回 平成18年10月 8日(日) 13:30

(3) 合同事務局会議(合事会と云う)

- 56回 1月15日(日) 13:30
- 57回 2月 5日(日) 13:30
- 58回 5月21日(日) 13:30
- 59回 7月16日(日) 13:30
- 60回 9月10日(日) 13:30
- 61回 12月10日(日) 13:30

(4) 系図展観

7月30日(日)(雨天中止)

(5) 祖先祭

10月29日(日)

※神社の都合で日程の変更もありますのであらかじめご承知下さい。

幡(旗)の完成のお知らせ

長年の懸案でありました私共同族会のシンボルとしての幡(旗)が評議員岡本安正氏の御好意により昨秋出来上がり祖先祭時に参列各位の前で披露されましたので報告致します。

■幡(旗)の仕様

- ◎縦 九十四センチ
- ◎横 三十六センチ
- ◎生地 正絹古代紫色
- ◎加工 シンボルマークと文字を白生地に写し取り、江戸時代に確立されたとされる、もち粉を主に糊状にしたものを防染材としてかぶせて染め、防染材を洗いを落とす後、八咫鳥部分に純金箔を貼り付けたもの。



賀茂縣主同族会幡(旗)

計報

謹んでお悔み申し上げます。

埼玉県所沢市 藤 木 顯 範氏

平成17年11月末日までに御連絡を頂いた方です。

編集後記

昨年は十二月初旬から降雪があり、又テレビでは連日のように幼児・小児への虐待が報じられ、身体の内外共に寒い日が続いて居りますが、清水寺の貫主の今年の今年の一文字は「愛」でありました。昨今の様な世相であるが故の一文字ではなからうかと思えます。